

私が言いたくても言えなかったこと

小牧市立小牧西中学校 3年

「嫌だ。恥ずかしい。」クラスでマスクを外して集合写真を撮るとき、そんな言葉が飛び交った。

三年前の一月に、はじめて新型コロナウイルスの感染が確認されてからの三年間、人々はマスクなしの生活はあり得ないと思う程マスクと共に生活してきた。マスクをしていない人は世間から冷たい視線を向けられ、店に入ろうとも入店拒否。しかし、そんな状況だった日本のマスクの着用は、海外とは違い、あくまで努力義務であり、義務ではなかった。

私はそんな状態に不満を抱いていた。学校の体育の授業やダンス教室での激しい運動中でも、マスクを着けていなければならなかった。熱がこもり、酸欠になり、頭痛を引き起こすこともあった。実際、ニュースではマスクを着けたまま体育の授業をして児童が亡くなるという事故も耳にした。義務化されていないにも関わらず、そこまでマスクをする必要があるのか不思議でならなかった。

そして先日、厚生労働省は令和五年三月十三日以降のマスクの着用は、個人の主体的な判断に委ねるとした。この報道を聞いて、やっとマスクから解放されるという思いだった。しかし、今の日本は、マスクをつけている人の方が圧倒的に多い。一体なぜだろうか。それは、今までの日本人の価値観が原因だ。

今までマスクをしていなかった人に、「何でマスクをしないんだ。」と激しく非難するマスク警察が誕生するほど日本は同調圧力が強く、また、マスクの着用が個人の判断になってからも「みんなが着けているから、外すことをためらってしまった。」と世間の目を気にする人がいた。さらに、マスクを外すことが下着を外すことと同じだと感じている人もいる。もはや人々にとって、自分の顔を見せることが恥ずかしいことになってしまっていたのだ。

それに加えて、海外では今までマスクの着用が義務化されており、着けなければいけない場面と着ける必要がない場面が明確に分けられていた。そのため、脱マスクの動きはスムーズに進行した。しかし、日本では着用の場面の棲み分けが曖昧だった。その結果、常にマスクを着けている状態が染みついてしまった。その、国民に染みついたマスクを着ける習慣が、なかなかマスクを外せない原因の一つだと思った。

日本はこのままでいいのだろうか。私はそうは思わない。コロナウイルスのせいで、スキー研修も、中学校の伝統も、これまで受け継がれてきたものも、今まで当たり前でできていたことができなくなった。それは、日常生活でも同じで、初めて会う人の顔、会話する相手の表情がマスクのせいで見られなくなった。みんながマスクによって縛られている。このような状態にはもう堪えられない。今はコロナウイルスが心配な人も居るかもしれないが、マスクを外していない全ての人々がそうである訳ではない。全ての人々がマスクを外す必要はないと思うが、この、マスクが外せなくなってしまった状態から一刻も早く抜け出さなければと思っている。

マスクを着けるかどうかは個人の判断だ。マスクを着けないこと、逆に着けていることを責めるのは間違っていると思う。周りとは違うからという理由で、世間からはみ出した者を排除しようとするのは、日本人の、「群れ」「周りに合わせ」「周りの様子を伺う」そんな無意識の習性があるからだと感じている。コロナウイルスの流行で、今まで気に留めていなかった悪い所が浮き彫りになった。

そんな欠点は、私たち新世代が変えていく必要がある。もっと人に優しく、寛容で、一人一人が想像力をもって行動できる社会になったとき、人々はマスクをしていないだろう。

日本の未来は、今の私たちに委ねられているのだ。